

を保有しているテート美術館などについて調査され、関連のヴィクトリア女王の切手なども紹介された。『The Doctor』と称する絵は三点あり、二点はフアイルズによるもので、一点はコピーである。フアイルズの一点とコピーは米国に、一点はテート美術館にある。フアイルズの二点は左右逆の倒像になっている。米国の切手はコピーによるものを採り、一九七〇年ドミニカで発行された「英国赤十字社創立百年記念」の『The Doctor』の切手はテート美術館所蔵のフアイルズが描いたものになっている。切手になった絵はともに医師が左側にいるが、最初にフアイルズが描いた(制作年代は不明)のは医師が右側にいる。これら三点の絵画と切手はカラーで表示されているが、ヒポクラテスの誓いを表徴するものと高く評価されている。絵葉書にもなりわが国でもかなり知られるようになった『The Doctor』だが、これには古川先生の果された役割が少なくないだろう。

他方医学切手の紹介は百六項目に及ぶが、その分類と項目数は以下である。人物切手(五〇)、国連関連事項と医学(八)、医療機関・会議と公衆衛生(二二)、疾病の診断・治療・予防(二七)。このうち日本に関連のある切手は十点あまりで、その一部は外国で発行(野口英世、向井千秋など)されていて、わが国発行の切手としては「国連およびユネスコ五十年周年」「京都大学創立百年」「日本の近代解剖教育」「高齢者向け郵便切手」「日本茶の歴史」があるに過ぎない。

先生には医学切手に関する著が今回のものを合せ四冊ある

と前記したが、その一冊は英文である。まさに先生は国際的であり、広い視野を持つておられる。さらなるご長寿とご活躍を祈りたい。

(長門谷洋治)

〔日本アクセル・シュプリンガー出版株式会社・〒二〇二一〇〇
八四 東京都千代田区二番町二一 二番町T Sビル、電話〇三
一三三九一七二一〇、一九九九年七月三〇日、B5判 二六三
頁、本体四、七〇〇円〕

日本内経医学会 編

『黄帝内経明堂』

かつて小曾戸丈夫氏が『黄帝内経明堂』仁和寺本復元試案例」と題し、『矢数道明先生喜寿記念文集』(一九八三年、温知会)に発表したことがある。頁数の関係から、一部の経脈のツボについてのみ公表された。全経脈について、いつ公表されるか、心待ちしていたが、諸般の事情があつてか、公表されないままに終わった。

ここに紹介する書物は、小曾戸洋氏をはじめとする北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部ならびに内経医学会の諸氏が、小曾戸丈夫氏の作成した復元本をベースに、再校訂をし、句点を施し、病症を整理し、さらに詳細な索引を附して、一九九九年三月に出版する運びとなったものである。誠によるこばしい限りである。小曾戸洋氏は本書の出版によつ

て第十三回中賞を受賞している。

『明堂経』は経穴学における最も基本的な書物であるにもかかわらず、原本が今日に伝わっていない。このため、『明堂経』を復元する作業がこれまでも数多く試みられてきた。この作業で大きな問題となる点は、原本に近い本が何種類も存在していたと推定されるため、整理する視点の違いによって、類型の異なるいくつもの『明堂』を復元することが可能となってしまう点にある。

唐の楊上善が注を加えた『黄帝内経明堂』十三巻のうち、第一巻のみが京都の仁和寺と前田育徳会尊経閣文庫に残されているが、本書はこれらを元に、全十三巻の本文の復元を試みたものである。

八年ほど前に桑原陽二氏が『経穴学の古代体系』(續文堂)の中で『黄帝明堂経』の復元を試みており、内容的には本書に近似している。ただし、桑原氏のもとは原『明堂経(三巻)』の復元の試みであり、本書とは目的を異にしている。

復元は緻密さを要する作業である。『甲乙経』、『外台秘要方』、『医心方』などを参考資料として、『明堂』の復元を試みたとしても、資料によって記述が異なる場合、どれを採ったらよいか、まず問題になる。これを決定するには、多くの資料を検討して頭を抱えなければならぬ。そのうち、だんだんと嫌気がさし、資料を山積したまま、仕事は頓挫する。このような経験があるのは私ばかりではなからう。復元作業は労多くして、功少ない仕事である。

本書は小曽戸洋氏ならびに内経医学会の精鋭が頭脳を結集してこの困難な仕事に立ち向かわれて、大きな成果を収められた。諸先生方のご苦勞は如何ばかりであったかと推察される。ところが、本書を開けてみると、その苦勞を全く感じさせない形式になっている。すなわち、復元文の結論のみを示し、諸資料は別にする方法を採っている(小林健二主篇『明堂総覧』CD-ROM)。メンバーの一人、宮川浩也氏は解説文に「本書の副題(針灸医学原典の臨床応用)にも示したように、臨床の面から『明経』を再検討してもらいたい」旨、記している。テキストとして本書を利用してもらいたいとの意図もあって、本書はスッキリした体裁を採ったとみられる。経穴の索引だけにとどまらず、個々の主治症の索引も附して、臨床で検証するのに便宜をはかっている。単に文献学的な研究だけでなく、血の通った平成の『明堂』を完成させたいとの諸氏の熱意が込められている。

(遠藤 次郎)

〔北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所…〒一〇八—〇〇七二 東京都港区白金五—九—一、電話〇三—三四四—六一、四六判、二七七頁、非売品〕

坂出 祥伸 著

『中国思想研究 医薬養生・科学思想篇』

「養生(ようせい)が「病後の養生(ようじょう)」から離れて